## テニアン島を追われて北谷へ帰る

北谷町字１０５５番地　照屋　秀

昭和十九年三月頃テニアン島に空襲があり、其後婦女子引揚命令が来た。理由は食糧問題だったが、食べ盛りの四人の男の子を持つ私は、残ってはお国の為にならないと思い引揚げる事にした。大きな船の出る港はサイパン島にあるのでサイパンに行って出航を待った。第一回の引揚船は立派な船だったが敵潜水艦にやられて多くの婦女子が犠牲になったので、第二回目の私達の引揚船はなかなか出航が決まらない。そのうちテニアン島から主人も見送りに来た。やっと木造船に乗せられ出航した。

敵の潜水艦をさけてのジグザグ航行で、サイパンから神戸まで一週間、神戸から沖縄まで一週間位かかったように思うが、無事那覇港に四人の子と共に着いたのは幸いだった。

昭和十九年六月三十日付で北谷国民学校訓導拝命、夫の安否を気付かいながら通勤したが正規の授業は二、三ヵ月位で後は生徒も職員もモッコをかついで飛行場作りに励んだ。

そのうち学校も兵舎になり、民家の私の家も表座敷は将校の宿舎になった。隣のお寺さんにいた紅顔美麗の特攻隊員は飛行機は足りないので舟で敵艦に体当りするのだと言っていた。

十九年十月十日の大空襲は米艦載機群が那覇の街と嘉手納飛行場を襲いに行くのを私は庭の木の下で見ていた。

長男と次男は学童疎開で対馬丸と同じ船団の和浦丸で出発していたので助かったが、今その子が四十代の働き盛りでいるのを見るにつけ対馬丸遺族の心情が察せられる。

長男、次男を学童疎開で見送った時「お母さんも後で行くから」と約束してあったので三男、四男と義妹と其の子供三人で疎開する事にして荷物をまとめ那覇で船待していたが、激しい空襲は止むことなく遂に慶良間島に敵上陸とのことで着替だけを持って二十キロの道を夜歩いて北谷の家に帰って来た。

しばらくすると家も危険だと思い丘の上の自分達のお墓に避難する事にした。その時首里第一中学在学中の義弟が「明日から軍服を着けます」と両親に挨拶に来て学校に帰って行った。

本土、または台湾に疎開しない者は北部へ疎開せよとの県からの指示があったが、墓に避難してから思いついた事は、敵が石川から上陸したら東西の距離が狭いので北部へ通過出来なくなるかも知れない、急いで北部へ行かなければと支度を始めた。もうその頃からは交通機関は無い。義妹の家族と両親と私は子供を背負い、持てるだけの食糧を持って昼間は隠れ夜歩いて、五日位かかって羽地村仲尾次にたどり着いた。

北谷村の疎開指定地は羽地村だった。山には竹で避難小屋が作ってあった。妹は「食糧が心配だから家に帰って取って来ます」と言って子供を置いて行ったが案の定敵が石川からも上陸して義妹は帰れなくなり、私は彼女の小さい子を預って苦労した。

一晩位小屋に泊ったら、山の下から駈け上って来る人が「大変だ敵が下まで来ている」と言うので、私達は子供を背負い、荷物を持って山の上へ上へと逃げた

翌日から私は、二歳の四男坊を背負い、四歳の宏君の手を引き頭に風呂敷包を乗せて歩く、義母は義妹の一歳の子を背負う。義父は天びん棒にザルを両方にさげて一方に荷物、

一方のザルに義妹の三歳の女の子を乗せて峯づたい谷づたいに、前の人について歩いた。梅雨時で雨が降り続いていた。雨に濡れての野宿も雨の降る時は戦は友軍に有利だと聞かされ喜んで濡れた。

幾日か山の中を歩いてやっと民家のある久志村に着いた。空を見上げると空襲も無い。通りを見ると、那覇あたりから来た避難民らしい人達が大ぜい歩いている。デマ情報がとび、「南部では日本軍が勝って住民は畑仕事も始っている」という。私達もお米が残っているうちに子供達を飢えさせない為に中部に近い所まで行っておこうと考えた。その晩皆んなで相談して、次の部落まで行って空家に入り寝ようとすると、パンパンと銃声がするので、おどろいて手さぐりで荷物をまとめて引き返した。

次の日は昼間歩くことにして老人を先頭に行くと道端に農民風の人が倒れていた。私達は恐る恐る腰をかがめて通って久志小と言う所まで来た。そこにも沢山の避難民が集っていて「今日はもう遅いから明朝米軍のトラックが来て連れて行くそうだ」と言う人がいる。

私は、米軍のトラックに乗せられたら捕虜になるから明朝は早く起きて金武村まで逃げようと話し合った。

金武まで行くとそこも避難民でいっぱい。やっと一軒の瓦葺の空家を見つけ、四、五十人の中へ割り込むようにその家に入った。翌日からは、主が堀りとったあとの畑を堀り返して、捨てた小芋を拾って来て食べた。近所の人からお碗一ぱいのお味噌を貰った。

家からは袷一枚着たきりなので夏に向って暑くて困った。そこで袷を解いて表を単衣にして着け、裏の赤い布地を義妹の二人の女の子に縫って着せた。シラミが湧いて食糧探しから帰ると着物を脱いでシラミつぶしである。金武には水量の豊かな泉井戸があって飲料水場、洗濯場、水浴場があったので五名の子供を連れて水浴に行った。洗濯場では米兵から石鹸をもらって米兵の洗濯をする女の人もいたが、その女たちを人々はうらやましいような、さげすむような目で見ていた。

義妹の一歳の子はまだ離乳もせず母乳もミルクも無かったので、山を逃げ歩いていた時泣くと敵に見付かるから泣かすなと、囲りからも言われるので、馬肉を買って茹でて口にしゃぶらせた。そのため胃腸をこわしたのには困ったが、母親が帰ってから半年後に高熱で死んだ。

金武からさらに中川へ後退移動させられた。中川には民家も無く、テント小屋に入れられたが、後で草葺小屋につくりかえられた。

米軍から罐詰の配給もはじまったが、野菜が無いので野草やツハブキの葉や茎、海岸に寄せるホンダワラまで取って来て食べた。友軍の物だったか粉味噌の配給もあった。

米軍から学校を開くというので教師経験者が集められ、そこで島袋全発先生や、池原早苗先生にも会うことができた。教室は無く海の見える丘の木陰で、木の枝で赤土に字を書いたり、歌をうたったり、体操等をさせた。俸給は罐詰二、三個貰った。島袋全発先生が石川に呼ばれ、「終戦の天皇陛下のお言葉を聞いた」との報告に皆声を上げて泣いた。

北谷村民のうち漁民は越来に帰してくれるとの事で私の家族も漁民の仲間入をして越来村に帰って来た。父は歩いて自分のところから木を切って柱にしてテントを張り住宅をつくった。昭和二十一年三月、私は安ヶ田初等学校勤務となり、月俸三百円であった。

安ヶ田でも当初は木に板切を下げて黒板代りにして教えた。それからテント教室になり、その後米軍払下げのカマボコ兵舎を貰って教室を建てた。

翌年北玉校へ転勤になり、先発の校長と二、三の先生が来ていたが仮校舎も無いので、私は嘉手納飛行場にある部隊にいって隊長に理由を話し資材を貰い、教室をつくリピアノも貰った。

昭和二十四年五月私は教職を退職し、精米所、アイスケーキ屋、食堂、雑貨店、化粧品店、映画館（株）、タクシー業、縫製業等七転八起、無我夢中で働いて来たが結局自分の家族を養い、子女の教育をするのがやっとであった。

【『想い遥か還らぬ人を』（沖縄県遺族連合会婦人部）所収】

## 傷痍軍人の足代りに馬を

仲地豊吉氏（五十四歳）

伊平屋村田名部落の仲地豊吉氏五十四歳は元海軍二等機関兵曹で昭和十九年五月頃熊野艦乗組員として、アンダマン諸島沖で船団護衛中米軍潜水鑑の雷撃により胸椎圧迫背髄損傷を受け爾来下半身不随歩行起立全く不能の第二項症であるが、若い時分には南洋で長年相当巾広く活動して鳴らしたと言うだけあって下半身不随の今日に於ても壮者を凌ぐ様な意気盛んさで、離島では珍らしい様な大きな邸宅を構え、田名部落でも有数な豪農ぶりを発揮している。

その仲地氏に一頭の愛馬があつて実に珍らしい馬だと村内では評判である。

それというのは仲地氏は前述の様に背髄損傷に困る下半身不随で歩行起立全く不能であるので田畑や部落にも自分で歩いてはいけないそれで一頭の馬を非常に可愛がり育て、自分の意の侭に動く様に訓練した結果今では仲地氏と此の愛馬との仲は人間の親子以上の親密さであり、上官に対し最も忠実な当番兵以上の忠実さで今では全く同氏の手足同様な役目を果たしているという。

例えば仲地氏が田畑の巡視や作業監督などの場合でも家族が同氏を愛馬の鞍に乗つけてやれば、チヤンと田畑まで連れて行つてやるし部落に於ける会合や催しなどのある場合でも同馬が連れて行って主人の用事が済むまで待っていて用事が済んで部落の人々が仲地氏を鞍に乗つけてやると、チヤンと家まで無事に連れて帰る。

特に面白いのは酒好きの仲他氏が部落の会合などで呑み過ごして前後不覚になった様な時でも、此の愛馬にさえ乗つけてやればどんな闇夜でも絶対に真違いないそうでそういう場合晩くなつて家族が寝ている時は馬が戸口の前で止つて前脚でカパカパ家族に合図して起すということである。

尚、同氏の家は山の中腹に在って部落から同家へ通ずる道路は片方が山が深い谷になり相当曲がりくねって道巾も狭いそうであるが部落民達の心配にも不拘末だ曾て此の愛馬は事故を起したことはないという。

芝居などではよく人間が馬の足を演ずるのであるが仲地氏の場合は馬が完全に人間の足の役目を果して居り動物とは言いながら調教如何によつては馬は案外人間より役に立つものだと専らの評判である。

【『榮光』第２号（（財）沖縄傷痍軍人会　中山勇吉）所収】

## 長袖に包まれた左腕

安里　由紀子（４４歳）
豊見城村字与根在住

◇六歳の時、艦砲射撃にあい、一瞬にして母と姉と弟を失う。その時、左腕に骨もあらわになるほどの重傷を負い、一ヶ月間も父親と逃げ回っている間ますます悪化。醜い傷が残ったうえに、充分には機能しなくなる。以来、傷跡を隠すために半袖は一度も着たことがなく、沖縄の夏の暑さを長袖で過ごさざるをえない。

子供の頃から私は、半袖を着けたことが一度もありません。沖縄の夏は、特に暑いのにもかかわらず、長袖で過ごさざるをえなかったのです。といいますのは、私の左腕には子供の頃に受けた沖縄戦での大きな傷跡があるからです。

戦争のことは、話したくありませんし、思い出すだけでも本当にいやになります。

私は、豊見城村与根に生まれ育ちました。家は農業のかたわら塩を作って売っていました。家族は、両親と祖父・兄二人・姉・弟・妹と私の九名でした。

昭和二十年の終戦直前、私は六歳で南部の糸満の浜に家族や親戚と一諸に逃げていました。後はもう逃げる所もなく、絶壁に追い詰められた私達は、木のうっそうと茂った所に皆んなで座っていました。そこへ突然、集中的な艦砲射撃にあい、一瞬にして、母と姉と弟を失いました。

母は妹にお乳を飲ませている時に胸に弾が当たり亡くなったのです。下の兄は、突然のことに驚きその場から逃げ出したので行方知れずでした。巡り会えたのはだいぶ後のことです。

私が今でも心残りでならないのは、すぐ下の弟のことです。まだ脈はあったのですが、ひどい傷を負っていましたので、もう助からないと思い、置き去りにしてきたことです。それだけに心痛く悔しくて、今になっても思い出すと涙が出て仕方ありません。

私もその時に傷を負いました。左手に弾が当たったのですが、その瞬間は痛みを感じませんでした。私は父に背負われて逃げました。一ヶ月ほど見つからないように隠れ回っていました。飛行機からビラがまかれ、「民間人ハ手ヲ挙ゲテ出テキナサイ」との呼びかけに、私達家族は出ていき、捕虜になりました。

逃げ回っていた一ヶ月の間、治療する術もなく放っておいた傷口は、すっかり腐ってしまい、その後連れて行かれた収容所で、初めて手当てを受けることができました。

南部の収容所でしばらく治療を受けていましたが、途中、中頭の収容所に移されることになり、その時、父とは離ればなれになってしまいました。中頭の収容所で叔母に会い、一緒に病院に連れて行って貰いました。

傷口は一ヶ月ほどで完治しましたが、弾が腕を貫通して骨が露わになった私の腕は、力が入らず、重たい物を持つこともできなくなっていました。えぐり取られた傷口は、幼い私の心と体にいい知れぬ重庄を与えました。

生まれた土地の与根に帰ったのは、二、三年後でした。

祖父と父・兄・妹、私が生き残りましたが、母亡き後、家族の世話は祖父がみることに

なりました。何ぶんにも年寄りの故か、思うようにもいかず、家事の一切が私の肩にかかってきました。まだ十歳そこそこの私には荷が重く、まして左手が不自由ですので、大変な毎日でした。そのため、学校へもろくろく行けず、すっかりいやになってしまいました。学校へ行っても、左手が不自由なので、体育の時間は見学ばかりでした。

この頃から、左手の傷を人目にさらすのが耐え難く、いつも長袖で手を隠していました。どんなに暑くとも半袖を着けたことはありませんでした。現在は、しゃれた長袖がでまわっているので夏用にも困りませんが、当時は、たまにもらう軍からの配給の洋服をなんとか縫い直して着ていました。年頃になって同年代の娘達が皆、思い思いの服を着ているのを見ると、着たくても着られない我が身の不運に憤りを覚えたのでした。

数年後、父は再婚し、次々に弟や妹が生まれました。それからは、家業の手伝いにあけくれました。家業は、シママース（島内産の塩）造りだったので、出来た塩を頭にのせて那覇の町まで歩いて行き、一軒一軒売りに行きました。野菜を売りに行くこともありました。売り切れるまでは、帰れません。今では考えられないことですが、この当時はあたりまえのことでした。

成人してから外に働きに出るようになって、困ったことがありました。最初は米軍の基地内で働きました。アイロン掛けの仕事でしたが、左腕は力が入らないうえ長時間押えていると、しびれてグッタリしてしまうため、皆のように早く掛けられません。それでも、給料は皆と同額貰っていましたので、肩身の狭い思いで一杯でした。仕事がまともにできないというハンディから、居たたまれず、軍のアイロン掛けはやめてしまいました。給仕もしましたが、長袖をつけたままでは人にうっとおしく映るのでしょう、「なんでねェー」という何気ない言葉に、普通の体ではないのだということを思い知らされるばかりですし、何といってもお客様に悪い印象を与えると思うと、長くは続きませんでした。簡単な品物造りにしても、左腕が効かず人の半分しかできないという状態でした。人一倍働きたいという気持ちは強く、なんとか自分にできる仕事をと必死に探したものでしたが、左手の不自由な私に適した仕事は何一つありませんでした。左手が悪くても一人前にできる仕事といえば、事務の仕事だと思うのですが、炊事や物売りしかしたことがなく、勉強は満足にしていませんので、それもできません。

もし母が生きていたらと、何度も思いました。働き者で頭が良く、教育熱心で温かな人柄と評判の母でした。気丈な母のもとにあったなら、このような不具の体をもった私でもきっと勉強することもでき、自分の仕事を持った社会人として胸を張った生活ができたはずです。そう思うと、私の人生を狂わした戦争に、今更ながら怒りを覚えるのです。人並みに働きたい、生きたいとの思いはあっても、思うようにいかない自分に何度も腹をたて悔しい思いをしてきました。

そんな私でも三十歳で縁あって結婚し、その後夫と共に沖縄から大阪に移り、そこで子供も生まれました。幸せな生活もつかの間、夫の仕事がうまくいかなくなり、今度は大坂から北九州へ移りました。そこにおちついた頃、腕に金属を補強する手術を行いました。

これまで使っていない左腕の骨がボロボロになって折れてしまっていたからでした。

手術後、それでも四角い金属が腕から突き出ているので、やはり今まで通り長袖を通すしかありません。そればかりでなく、今度は右腕の方まで疲れや痛みがひどいのです。

その上、腰の痛みも出てきて生きたここちがしません。あちこちの病院に診てもらいま

したがこれといった原因が見つかりませんでした。

更年期障害というにはまだ早く、おそらく右腕の方に負担がかかり過ぎて、年と共に身体全体に影響が顕われてきたのだと思います。その後、沖縄に帰り、しばらくまた塩造りをはじめましたが、それも許可制になったため自由に出来ず、今度は食堂を始めましたが、また行き詰まってしまいました。それから色々あり、結局夫と別れてしまいました。せっかくつかんだ幸福だったのですが、束の間の春でした。

今にして思うと、商売の大変な時など、普通の妻でしたら車の運転もできたでしょうし、手助けはいくらでもできたでしょう。炊事、身のまわりのことにも不自由で、すべてに行き届かなかったことが、大きな原因になっていると思うのです。

最近になって「六歳未満援護法」が適用され、私もその保障を受けることができました。

戦争で片腕や両腕を失った人等、私よりももっとひどい目にあった大勢の人に比べると、私は幸せな方だと思います。

しかし、もう戦争はいやです。

生涯、この後遺症を背負いつつも、細々ながら息子の成長を祈り、幸せを求める心だけは忘れず生きていきたいと思います。

【『いくさやならんど－』（創価学会婦人平和委員会編　栗生一郎）所収】

## 私の戦争体験

沖縄県　　平 良 武 雄

日本政府は移民を奨励していた時分だったので、私は昭和十七年にお国のために、食糧増産の先遣隊として満州に派遣してもらった。

しかし、満州でソ連軍の不法侵略にあい、戦争となり、男性は十八歳から五十歳まで、ことごとく召集をうけて、のこった婦人、子供、老人ばかりになったので、言葉に絶する惨状となった。塗炭の苦しみとはこのことと思う。

私は軍人に召集され、軍務に服していたが日本敗戦となってから、ソ連軍に逮捕され、捕虜としてシベリアに抑留となって惨憺たる目にあった。幾度か死に直面したが、不思議に生きて舞鶴港に引揚げてこれた。

一　戦争ほど下等な争いはない
一　戦争は最大の残酷な争いである
一　戦争は人を野獣に変える

軍国主義日本の行動が、こうも世界を相手に戦わねばならなかったのか、余りにも無謀な行動に出た日本、国際連盟を脱退した当時、外務大臣松岡洋右の行動は余りにも横暴であった。日本は国土が狭く耕地面積が無く、当時の政府は耕地面積のゆとりのある国を探し移民を推進していた。その時中国大陸満洲にも目を付けた。そこへ食糧増産の先遣隊が派遣されたのが昭和七年、私も十七年に移民に応募したのである。

戦争が身近に迫ってきたのが昭和十九年の末ごろのこと、ソ連政府が不可侵条約を破棄して、満州侵略へ行動開始したとのうわさであった。時をへて開拓団の中からも、五～六

人、七～八人と召集されるようになり、ただならぬ雰囲気が開拓地全体を揺り動かしていた。一番の心配は、命にも等しい薪の確保と食糧をどうするか、食糧も割当てにほとんど拠出し、手持ちが一週間ほどしかないと騒ぎ出す婦人たち、急な召集令状が渡ったため、配給の手配が届かぬせいだった。冬を目前に薪の確保は食糧以上に必要欠くべからざる難問題であった。時は流れ難問が続出した。

男たちは、十八歳から五十歳までが召集を受けた。残ったのは婦女子ばかり。ある日母親たちは山へ、家に残ったのは幼な子ばかりだった。外は零下三十度、親たちが山から薪を運んでたどり着いて驚いた。子供たちは口もきけぬほど冷えきっていた。ガラス窓には小さな手の跡が白く凍りついていて、いかに寒さに耐えていたか、想像を絶する。指先を切断する子は一生かたわで生きねばならず、その数、数十人、日本から初めて来た家族などは、防寒の経験がなかったせいの事故だった。泣くに泣けない哀れな経験は一日でも早く、はってでも日本に帰りたいと、騒ぎ出す始末。けれど押し寄せる戦争のまえには、なるがまま、なせるがままの日日でしかなかったのである。

昭和二十年六月召集を受け、チャムスに集合、そこで松下中隊長の命で特務機関に配属になり勤務に就く。訓練なしの勤務は、どなられどうしだった。命令を受領し各中隊に、伝達の仕事だった。すぐに命令があるのでなく、将校連中の中で、退屈な時間をつぶしていた。その時ちょっとした論争が起こった。ある中尉が言葉の端をとらえ、「戦争とは敵を全滅させるためにあるのではなく、降伏させるためにある」と言いきっていた。ある者は、生かして帰せば見返りを受けるだけだと言い、全滅が無難だとも言う声もあった。時代が時代だけに、なかなか勇気のいる言葉だと、私など思った。

連なる山脈の下の、古ぼけた部落を、日本軍が占領した。小さな村の中で一番大きな茅葺きの家が指令室になっていた。ある日の夕方、ソ連の戦闘機三機が山手の方から低空でやって来て、機銃掃射を始めた。これでおしまいと思ったが、この三機の目標はここではなく、近くの小高い丘の小屋を目がけて、三機がかわるがわる撃ちまくって引き上げて行った。　この中に二～三人の特別運の良い奴がいるのかねと、上官の口から冗談がとび出る始末、毎日が命をかけての戦闘なのに、こうしたのんきな日もあるもんだと、これも思い出話のひとつでした。

チャムスの街から、北へ六キロほどのところに、日本人の経営する農事試験場があった。ある日そこを通り抜けるため、四千人ほどの隊員が試験場にさしかかったら、素裸の日本婦人八人、年令三十代の女盛り、顔は真っ青になって泣きながら助けを求めて来た。皆を毛布で巻き、落ちつかせてから事情を聞いた。すると、男一人もいない日本人婦女子ばかりの開拓村へ満軍兵士と一般人男子が数千人やって来て、生きたまま婦人や子供たちを手当たり次第に井戸の中へ放り投げている、それに自分たちも人の面前で何十人もの中国人に暴行を受け、すんだら向こうへ行けと日本人部隊を指して追い払ったと、がたがた震えながら語った。兵隊さんたちこの姿を見てくれと、泣き叫ぶ彼女たちを見て、血気盛りの日本軍人はたちまち血の気が逆上、隊長から「あの部落、一軒残らず焼き払え」との命令が下った。兵は一斉に行動開始、藁葺きの家に石油をかけて次々火をつけてまわる。中から住民が、男女子供と飛び出す。それを追いかけ、とっつかまえて、燃える炎のなかへどんどん、二人一組になって投げつける。炎の中で曲がりくねって人は燃えて行く。血も情もないこの惨状をなんに例えよう。しかしこれは、生きたまま井戸へ投げ込まれ、泣き

叫ぶ日本人婦人や子供たちの仕返しの行動でした。

夕日は西に落ちかけ山道はうす暗く、丘へ上って小休止した。一応点呼をとり人数の確認、八百人ほどの兵と難民百人ほどでした。食事もとらぬまま、この山で一夜を明かした。ところが朝の四時ごろうす暗い時に、前方の満人部落の土壁から機関銃がこちらめがけて撃ち込まれてきた。隊は散開して林の中へ逃げ込んだ。我々は下の谷間へ集合、その中から十人希望者を募った。目的は前方の敵機関銃隊の全滅であった。私もこの中に加わった。毎日毎日伝令の任務で根尽き果てていたので、早く戦死して楽になりたかった。この十人は決死隊なので生き残れる道はない。人数の確認のため、右から番号の号令がかかる矢先、後ろから私の肩を力一杯引っ張る者がいた。「平良さがれ」と太い低い声である。そしてすぐ代わりの者が出されて列に並んだ。松本という朝鮮人であった。十人は五人が二手に別れて、コーリャン畑の中へ走った。三十分ほどたった。満人部落の右と左から一斉に手榴弾の十個が爆発した。その後機関銃の音は消えていた。夜明けと共に隊は前進、途中部落の中を見てまわったら、敵の機関銃隊はもちろん姿形もなく、味方の十人もバラバラで見分けがつかないほどだった。私の身代わりももちろんこの中である。思い出す度に慚愧に堪えない。昨日の戦闘で、隊員は消耗してしまった。何十人倒れたかは確認もないままであった。これが第一戦の姿である。

当隊は山から山へ移動を続けた。三日目の朝、多羅密川にさしかかった。当隊はその川を渡らねばならず、両岸に針金を通しその一本をつかまえて一人一人渡るのである。後ろからついて来た開拓移民団四～五十人の婦人たちは、子供の手を引いては渡れないために、川岸に十四、五人の幼児をそのま放置。運を天にまかせ川の中へ入る。とたんに流されて行く。下流の曲がり角には、赤ん坊をおんぶし腕にふろしき包み、全員うつ伏せになって浮いていた。生きた者一人もなく、翌朝昨日の場所に来てみたら、十四～五人の幼児は、オオカミの群れに襲われたのか、顔から首、手足も骨だけ残されていて、下半身から腸が引っ張り出されていた。この惨状を見たとき、この世には神も仏もないものかと、つくづく思った．話によれば、島根県出身の開拓団員たちの姿である。

偶然、山からぬけることが出来たのは、昭和二十年九月二日であった。近くの満人部落からソ連兵の集団がやって来て、包囲されたのである．部落へつれて行かれ、ソ連将校から初めて、戦争がとうに終わっていることを知らされ、なんと無駄な苦労をしたもんだと、皆が抱き合って泣いた。

あの広い広野に散在する移民団、ハルビンへハルビンへと移動して行く難民の群れをなんに例えよう、その数、何千何万の婦女子は力尽き果て、手を引いて歩いた幼な子は、次々に親の手を放れて泣き叫ぶ。体力と精神の限界の中、広野に我が子を置きざりにして別れて行く母親たち。涙一滴見せる者はひとりもいなかった。これが残留孤児の始まりである。隊列が乱れるので小休止の命が下った。その時、側に座り込んだ婦人の言うには、私もチャムスの街角の塵捨て場に四歳の女の子を置いて来た。これから山道へ入るというので耐えられないと判断、それに塵と一緒に捨てるということではなく、塵捨て場ならなにか口にする物があるだろうと、思ってのことでした。とにかくなにか食べ物を与えたかったのですと言ってうつむいた。とにかくあの子たちを助ける神が現われることを祈らずには、いられなかった。その日の夕方、中国人のあいだに話題が広がった。どこそこの山道に捨て子が散在しているとのことを中国婦人たちは聞いて、捨て子たちを拾って帰って来

たという。八百人ほどの集団の中から出た捨て子たちである。あの広い満州、百八十か所の開拓移民村は同じ状況である。中国人婦人たちは、あの苦しい生活の中で敵国の子供たちを幾千人、いや幾万人育てたであろう。まさに人道に徹した、中国国民であると心の底から感謝するものである。今なお未解決のまま、終戦五十年近くも異国の地で暮らす日本人の心境はいかばかりか、大切に育てられても自国に未練があるのは、人間本来の姿である。

昭和二十年九月五日、伊漢通港から約四個中隊が船に乗せられた。皆はダモイダモイ、日本に帰ると言い伝えられた。ところが船はその日の夕方、ハバロフスクの港に着いた。しばらくして夜明け前、下船が命じられ続いて貨車に乗り移り、出発の汽笛がけたたましく鳴りひびき、貨車はカタコトカタコト、動き出した。一週間ほどして、シベリア大森林の中で夜明けの静けさをやぶってけたたましく汽笛が鳴りひびき、貨車は止まった。下車してあたりを見たら、大きな倉庫が立ち並んでいた。革命当時の政治犯たちの重労働者の作業拠点で、千人ほどが住んでいたとのこと。井戸もあり、並んで用を足すため露天便所は一度に五十人も出来そうな造り、我々もそこを使用した。我々は一級罪人の身なれば致し方ない。露天の寒風の中、用を足す時の苦難は普通人には想像を絶する一時でした。入所二日目から大木の伐採、毎日毎日がノルマに追われた。割り当てノルマによって翌日のパンの量が違ってくるので、五人一組の一致団結は固く、二人びきの大ノコは根付き果てた。防寒具に身を固めての作業、真白い息を吐く姿は牛馬同様であった。時は過ぎ二年目の冬からは山で作業中、眠るように死んで行く者が毎日出た。飢えと疲労と寒さは体力の限界であった。一人の友人はノコ引く手を止め丸太の上に身を伏せ、かすかな声で故郷の母親の名を呼んでいた。近寄って「どうした、苦しいか、おーいどうした」と声をかけて見るが、うなり声と一緒に、「お母さん、お母さん」と呼びながら、次第に息絶えていった。この最後の声をお母さんに届けと、祈らずにはおられなかった。二〜三日が過ぎ石橋一等兵が、山から帰ったとたん転がるように床に就いた。食事もとらず、うなっている。寝床は私と並んでいたので、「どうした、おい、おい」と声をかけれど返事がない。彼のために食事も枕元に置いてあるが手もつけていない、苦しそうにうなっているがどうしようもない。こんな罪人収容所に医務室などあるはずがない、いつの間にか息絶えていた。哀れ彼は妻子もおる。東大の数学の先生だったと聞かされた。中隊長の近藤熊助中尉もこの事を知って、ソ連の係官同じく中尉シェンチェンコに話したら、特別はからいで中隊葬儀が行われた。伐採道路の横の切り株の側に雪を払いのけ、毛布にくるんで寝かせ雪をかぶせた。花岡上等兵は坊主の息子、彼の読経と中隊長の弔辞であった。

弔辞　石橋上等兵　ここは日本から遠く離れたシベリアの地だ。寂しくもあろう。寒くもあろう。しかし君は日本軍人だ。耐えねばならん。君の冥福を祈る。中隊長近藤熊助。一同敬礼で葬儀は終わった。

私は今だに彼の一切の事は忘れていない。山仕事が一緒、班が一緒寝床まで一緒、朝と晩のめしも一緒、人生を語るのも一緒だった。彼とは、本当に一本の煙草も分けてのむばかりではない、お互いに、故郷の山や川の美しさを語りあい、優しい母の言葉など語りあっては涙を流し、死ぬときは一緒だと抱きあった仲だったのに。彼は東京都出身、昭和二十年終戦の年で三十二〜三歳、眼鏡をかけ小柄な無口な召集兵であった。もし彼の身内が御健在だったら、一切の事情を話してあげたい。

そのころ毎朝、四～五人の遺体が安置小屋から運び出され、夕方になると小型トラックが来て運ばれていった。一緒にトラックに乗った使役係の連中の話では、谷間に放り投げて来たと聞かされた。戦争に負けた国、その国民はいかにみじめであるかと強烈に肌で感じたものである。

昭和二十年の十一月ごろからソ連の係官将校の家庭で当番させられていた時があった。家庭といっても、罪人収容所の係官の住む所はまるで地方の小屋同様だった。しかし私にとっては、在日伐採に行ってノルマに追い立てられるより、天国だった。少しばかりソ連語が話せたのがさいわい。将校の家庭の仕事は薪割り水汲み、雪かきストーブの火起こしが主な作業、暇になると奥さんと雑談。主人は出て行く。いつも二人きりでした。主人は陸軍中尉名前をシェンチェンコ、奥さんはウーリャンといい二十一歳のかわいい人だった。毎日朝は部隊の中からゲートを通り二百メートルほどの家に通い、晩はその道を戻る。毎日三食、三人で食事、同じテーブルを囲み仲良く食事をする。私は捕虜の身でありながら全く同じ家庭でした。戦友は山で極寒の中、大木との格闘の最中でも、こちらはストーブにあたりながら美人と雑談では、全く皆に申し訳なく思った。この生活も、四か月で終わり私は山へ再び戻った。余りの生活の差なので、誰にもこの生活振りを帰るまで漏らしたことはなかった。

さようなら、スパシーバ。（ありがとうございました）共産国は革命のためなら自国の国民でも逆らう者は容赦なく始末する、残虐な行為があるが、それは指導者、権力者のみのやることで、一般市民は外国と同じ道徳心を持ち、人情あふれる民族であることが初めてわかりました。

昭和二十三年四月ハバロフスク近く、ウスリウ江の沿岸に、我々が伐採した大木が筏に組まれ、川一杯に流されていた。陸の上には大工場を思わせる製材所があり、川から流された木材をウインチで引っぱり上げる組と、製材機にかけ製品にする組、製品を片付ける組、それを列車に積み込む組と、作業は分担よく整理され、たいへん能率的であった。ある日トラブルが起きた。近くの住民が、馬小屋を修理のため製材所からでた廃品二枚を、夜中盗んだという。年は五十歳ぐらいで、監視員に捕まり連行されて行った。隣の者から密告があったとのこと、全く情ない。共産国の罰則のきびしさは、たった木片二枚で二年も刑務所暮らしとは、なんと非人道的な権力主義のあさましさである。

我々捕虜も慣れぬ仕事のせいかけが人が続出し、ノルマが上がらぬため、割当ての食事が減らされたのが、なによりもつらかった。腹がへって寝つかれないので水をがぶ飲みする。飲むと便所に起きる。そうした時ほど故郷の母のことが思い出され、涙をふきふき夜を明かす時も度々あった。まるで子供のように。側に寝ていた鳩ヶ谷一二三君も、寝返りばかりしている。「鳩ヶ谷どうした」と聞けば、「青森のお母さんの夢に起こされた」と言って寂しそう。忘れて寝ようと耳うちして寝た。ところが、その朝起床したら、鳩ヶ谷がいない。朝になって、班内が大騒ぎ、警備員が入って来ていろいろ聞かれたが、何も知らんの一点張りで通した。逃亡兵が出たことが収容所内に広がり、えらい勇気と感心する者、逃亡は絶対成功しない、とうとう話題になった。しかし三日目には警備兵に捕まり、山で殺されたことを知らされた。彼の出身地は、青森県津軽だった。ハバロフスクの街から近い収容所、ここからも栄養失調で亡くなる者が続出した。

昭和二十三年の夏ごろ、ハバロフスク郊外のれんが工場に、一個中隊が移った。同じく